

昭和五年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079  
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

特集 向坂逸郎先生を語る

■巻頭言■

向坂先生の著作を読む

わが兄・向坂逸郎 向坂正男

詩その時—八五年一月二四日の心象風景

稲田芳朗

或る日の石井柏亭と向坂先生

百瀬嘉郎

◇座談会 向坂逸郎先生を語る◇

先生のまいた種を育てる

岩井 章・灰原茂雄

先生の字で組合旗

吉田 憲夫

「CO特別立法」と向坂先生

山下 憲夫

闘病の中でも私に勇氣

滝野 嘉津子

「よくねむりなさいよ」と電話

大木 五郎

生き方を決めた先生方との出会い

松村 七郎

「土づくり」で意見交換

小林 隆

向坂先生は生きつづける

平岡 幸雄

私たちの背中に先生の笑顔がある

池村 武司

著書の大半執筆 ゆかりの松本・扉温泉

.....

# 旬刊 社会通信

NO. 256

一九八五年二月二日

一九八五年二月二日

(毎月一日・二日・三日三回発行)

## わが兄・向坂逸郎

向坂 正男

遺族を代表して、御挨拶申し上げます。

兄逸郎は子供が好きで、甥姪を大へん可愛がっていました。私も内輪では「マルクス伯父ちゃん」が兄に対する愛称でした。かつて小さかった私どもの子供たちが「オーイ、マルクス」といって飛びつくと、ニコニコ顔で抱き上げていた様子が、今でも目の前に浮びます。その「マルクス」も、ついにあの世に逝ってしまいました。

兄は、酒、煙草をいっさいやらず、もっぱら甘いものをたらふく喰べていました。この点はマルクスとちがっていました。十数年前に、社会主義協会の活動資金集めのために、故大内兵衛先生に書をお願いして、売り捌いたことがありました。そのとき先生が兄に贈ったものでしょうか、色紙に先生らしいユーモアのある句が書いてあります。

マルクスのふきし煙の資本にて、

わが向坂はまんじゅくいおり 兵衛

兄はこれを書齋にずっと掛けておりました。晩年には、京都のふまんじゅうが大好物でしたが、入院三日前に、八個ほぼぼったのが、喰いおさめとなったそうです。

私は、高等学校から大学にかけて、兄のもとで暮らしたのですが、マルクス主義研究に打ち込む真剣な姿には、ほんとうに感心しておりました。当時、地代論争、日本資本主義論争などがさかんにおこなわれた頃で、雑誌改造や中央公論に論文を寄稿していましたが、一つの論文を書くのに多くの文献を読破、考え込み、まさにうなりながら書いていた姿を想い出します。ひと仕事おえると、嫂をつれ出して、古本屋をあるき、しるこやに寄るのを楽しみにしていました。政治思想のみでなく、社会的行動、私生活にいたるまで、マルクス主義者として徹底しなければならぬ、というのが兄の信条で、私も若いとき、たびたび説教されました。多くの方々から兄に叱られた話をきくのですが、兄は他人にも厳しかったが、自らを律することは、より以上に厳しかったと思います。

兄逸郎の政治的活動についての歴史的評価は、後世に俟つほかありませんが、兄の一生をみると頑固一徹といえるほどに、マルクス主義の立場に立って、労働者や青年の教育に、社会改革に、悲愴感などなく、当然のことのように、全人生を捧げたと思います。その意味では、悔いのない人生を送ることができたのでしょう。今日遺骸の前にかざった写真は、そのようなもののみもちうる明るい笑顔とでも云えましょう。

昨年六月以来七ヶ月の病院生活でありました。はじめ二・三ヶ月は、退院してリハビリテーションに入れるか、との望みもありましたが、脳硬塞がすすみ、最近三ヶ月は危篤の状態を続けておりました。その間に何回か危機が訪れました。頑健な身体、とくに心臓が強じんであったので、それを乗り切ることができたのですが、十二月十日以降ほとんど意識をうしない、一月二十二日未明ついに静かに永久の眠りにつきました。主治医丸山勝一先生は大往生であったと云われました。

入院以来丸山先生の指揮の下に、担当医の方々は近代医療の粋をつくして、回復に努力され、また看護婦の方々には格別親切に看護して下さいました。厚く御礼申し上げます。また、和気誠、十文字豪郎両君は、毎日交代で病室に詰め、親父を扱うように気持ちのこもったお世話をして下さいました。嫂は七ヶ月間病室に寝泊りしていましたが、疲労で倒れないですんだのは、全く両君のお陰であります。感謝の言葉を見出せないほどです。

今日の最後のお別れの会には寒さ厳しい折にもかかわらず、御参列をいただいて誠にありがとう存じました。多くの親しい友人や同志の方々に見送られて別れを告げる、兄逸郎は本当に幸せだと思えます。

その時

— 八五年一月二四日の心象風景

国労本部中執 稲田 芳朗

その時、花を手には写真を見上げていた

花はまだ蕾に近い

若々しい白い菊の一輪

頭を下げてふり仰ぐ眼に

すどく扉を叩く音と

深い山あいを流れるせせらぎが漂い

くるまれて立ちつくす

「革命」を知る人のみが持つ

笑いをたたえた顔が拡がっている

正しい道をまっすぐ見つめるようにと

正しく生きているかと問われたように

背すじをのびし

足を大地にしっかりと踏みしめて見る

樹々の間から

灰色の雲が

冷たい模様を描いてのぞいていた

いつまでも立ち止まることも出来なくて

花を供え

写真に背を向けた時

胸の奥そこからあつく

「インターナショナル」の歌がほとばしっていた

## 或る日の石井柏亭と向坂先生

百瀬 嘉郎

日比谷公園近くにある東京家庭裁判所の三階会議室には柏亭作の五十号の油絵の風景画がかけられてゐる。これは柏亭が家庭裁判所の依頼をうけて昭和二十五年の春松本の郊外島立村堀米で書いたものである。若い農家の夫婦が農耕の中休みに茶を呑んだり幼児に授乳したりしてゐる和な田園風景である。春の日と題してゐる。一枚海岸で、多分熱海あたりであらうか若夫婦と子供が睦んでゐるところで、これも五十号である。こちらは春の海と題してゐる。毎日離婚ばかり多く扱ってゐる裁判所の役人が氣を使つてのことであらう。このうち「春の野」は柏亭先生が書きあげたところでそれを向坂先生が東京に運んでゐる。

戦時中は色々な人が疎開した。柏亭先生はあと長く居られたし、向坂先生は半疎開とも言える程松本には屢々こられた。随つて御二人は屢々會はれる機会があつた。長い戦争で平和や文化と言ふことに餓えてゐた村人が疎開された人々に近づきたがつてゐることは寧ろ当然で、短歌の岡麓、鑄金の香取秀真、その他無名の人でも何かの機會からその周辺に集つた。そうしたグループがいくつも出來た。私達も香取先生や石井先生をお邪魔したものだ。石井先生が五十号の大作にいんどんでゐられることを見逃す筈がない。まして村の若夫婦がモデルになつてゐる。天氣の良い日には画作されてゐるところえお邪魔したり、愈々完成となると完成祝をもちかけたりした。

愈々その日になると「酒はのまれないが向坂先生にも連絡しろ」と言ふことになって松本の蕎麥屋に集まつてもらつた。その日は皆、上氣嫌であつた。絵の素養のある向坂先生と柏亭先生は特に話のはづまれたようだ。そのうちに向坂先生が突然爆發した。柏亭先生が「昔から大作で傑作は宮廷畫家か、貧乏な人は理解ある人の援助によつた場合が多かつた。その点金持も亦大事だ」と歴史の事実をあげて話された。しかも「その点社会主義社会は都合が悪い」と言はれたのだからたまらない。「そんなことはない。」と俄然巨砲一發向坂、「社会主義社会は学問芸術を大事にする。したがつて作者も出るし、観賞眼も肥えてくる。社会全体の芸術的雰囲気は向上する。又秀れた才能も發掘される。眞の傑作は社会主義社会で發見される機会も又多い。」和な酒宴は轉じて論戰の場と化した。

お二人とも主張を曲げられない。結局私が仲介の勞をとつて「どちらも眞理だ、両方も傑作を出し得る」と言ふことで一應結着して、酒宴は再び和かに續いた。そしてたのしかったからまた會はうと言ふことになつた。その日は先生達二人とも東京に一先ず帰られる日であつたので和かに松本駅に向つたが、酒の入つた石井先生に五十号は老体で無理だと言ふことになつて、若くは向坂先生が責任をもつて新宿駅まで届けると言ふことになつて、お二人とも御機嫌うるはしい御帰京であつた。

武者小路のよく言はれた「君子は和して同ぜず」か。お二人とも今はない。

(長野県松本市在住)

## ■巻頭言■

## 向坂先生の著作を読む

「哲学者たちは世界をさまざまに解釈してきただけである。問題は、世界を変えることであるのに」

これは向坂先生がもっとも好んだ言葉である。マルクスの『フォイエエルバッハに関するテーゼ』の一節だ。向坂先生は、この言葉を書庫に刻んだ。マルクス、エンゲルス、レーニンのレリーフとともに。

この書庫の主はいない。先生は考えることをやめた。万巻の書と膨大な著書を残して。先生は革命家であった。マルクス、エンゲルス、レーニンがそうであったように。資本主義社会と、それによってつくりだされた国家制度との転覆に、いろんな方法で協力すること、また近代的プロレタリアート、すなわち、彼がはじめて、それ自身の状態とその要求とを意識させ、その解放の条件を自覚させた近代的プロレタリアート、これの解放に協力すること、——これこそ彼の生涯の真の使命であった。闘争が彼の本質であった。そして彼は、たぐいまれな情熱とねばりづよさをもって闘い、その成果をあげた。

ドイツ留学時代、先生は「本の洪水」の中に飛び込んでいった。「読める言葉で書いてあるマルクス、エンゲルス、レーニンの著作は全部読む」と。当時のドイツは大インフレーションの時代である。古本屋・シュトライザンドに通い、マルクス主義文献を買いまくった。

社会主義協会の前身「労農」は一九二七年二月、創刊された。山川均の「政治的統一戦線へ！」が巻頭を飾った。先生は、いわゆる「教授事件」（一九二八年）で九大を追放されたあと、「労農」同人となった。

雑誌「改造」を中心に先生は、地代論論争、日本資本主義論争の渦にとびこんでいく。先生の論争のさまは後に「地代論研究」「日本資本主義の諸問題」としてまとめられた。「労農」派の第一の古典である。

先生の戦前の業績はそれにとどまらない。世界初の「マルクス・エンゲルス全集」を刊行した。一九二八年から三年の仕事である。一九三七年二月の「人民戦線事件」で先生は筆を絶たれた。一九四〇年の出獄後、百姓生活で生命をつないだ。

一九四五年八月十五日。日本帝国主義は敗北した。先生に言論と行動の自由がもどった。ただちに山川均とともに社会主義運動に身を投じた。先生は九大に復帰した。しかし、先生は活動の重点を、社会主義運動の中でマルクス主義の勉強をし直すことにおいた。三池労組での「向坂教室」、社会主義協会、社会党・総評の階級的強化が主な活動の場となった。『資本論』の翻訳（一九四六年から一九五二年）、そして平和革命の可能性をさぐった「歴史的法則について——社会革命の展望」（一九四六年九月）が戦後第一の大きな仕事だった。「歴史的法則について」の平和革命論は「左社綱領」（一九五四年）、『道』（一九六四年）、『社会主義協会テーゼ』（一九六七年）、『国民統一の基本綱領』（一九七三年）に受け継がれた。

「向坂教室」は一九四七年から始まっている。炭労の「六三スト」（一九五二年）、三池の「英雄なき一二三日の闘い」（一九五三年）を経て、地道に粘り強くおこなわれていた「向坂教室」は、労働運動のモデルとされた。安保と三池のたたかいは「向坂教室」の名をさらに高めた。

先生の著作は数え切れぬほどある。いずれもが「革命と改良の弁証法」「理論と実践の弁証法」を、日常闘争の中で明らかにしている。日本が歴史的岐路にあるいま、先生の書物から学ぶことは多い。労働大学の向坂逸郎シリーズ、社会主義協会の「日本革命と社会党」はとりわけ有意義だ。なんでもよい。一冊でも先生の本を読んでもみよう。

座談会 向坂逸郎先生を語る

## 先生のまいた種を育てる

岩井 章（元総評事務局長）  
灰原茂雄（元三池労組書記長）

一九八〇年、当社で岩井さん、灰原さん編著の『階級的労働運動への道』を出した。向坂先生に序文をお願いした。先生はこう書き著している。

「この二人ともにどれだけ偉くなるか見とどけたい人物である。しかし、これは真理である。二人が私よりはるかに若いからである。」

このお二人に、向坂先生の思い出、これからの私たちの進む道を語ってもらった。

### 三池政治文化研究会が最初の出会い

滝野 まず向坂先生とお二人のそれぞれの出会いから伺いたい。灰原さんどうぞ。

灰原 私は昭和十年から十四年まで国鉄にいたんですが、どうしても官立ばかりを大事にしようが。私は苦学して私学ですから、しゃくにさわって、ヨーンということで大陸を志願したがいっぺんは所長に断わられた。二回目に、満鉄がだめなら華北交通ということで、華北交通に行くことになった。北京に二年間おつていろいろやったが、橋梁の実習をやれということでごちに来た。二年たつて北京に帰るときに海軍に召集された。終戦になって、東京の西大久保に家があったが、おふくろも妹も焼かれたので、国鉄には戻らずに、私は女房と一緒に三池に行っただけです。

しばらくして三池炭鉱に採用されたわけですが、三池に帰った直後から、三池町の郵便局長で樺島佐次郎という同志社出のおもしろい人がいて、この人と何かやろうじゃあないかというので、昭和二十一年の春ごろから三池政治文化研究会というのをつくったんです。三池には古い家柄の人がいて、学歴もあり、なかなか優秀な人もいて、みんな三池政治文化研究会をつくった。私が事務局長格で、戦後民主主義の高揚期なので、地方の文化団体、政治団体ということで、講演会をやろうとなり、アメリカのライマン博士、続いて向坂先生が大牟田出身だから頼もう、となって頼みに行っただけです。そしたら先生はスッと引き受けてくれた。後からお聞きすると山川さんとの話もあったわけで「どうせ復学するなら、君は三池出身だし、三池炭鉱は大きいし、学習会をやろうか」と。二年夏、安照寺で講演会をやったが、本堂からあふれんばかりになった。向坂先生は喜ばれて、帰りに樺島局長の二階で一緒にご飯を食べた。このときにいろいろ話をして、それで近づきになったんです。

しばらくして、勉強会をするなら家に来い、というわけです。湯村武人という九大の経済学部長をやった人ですが、彼が仲介をやってくれた。湯村さんを介していろいろな話があり、二十名ばかり連れてこいと言われたので、三池政治文化研究会の仲間を含めて二十名組織して行った。そのころぼくは組合にぜんぜん関係ないんです。行っているうちに先生といろいろなつき合いになったと、こういうことです。

岩井 向坂先生は福岡に住んでいたんですか。

灰原 倉永という大牟田市外の、妹さんの家です。

岩井 学校はどうなっていたんですか。

灰原 通ってました。復職されて大牟田に来られた。

## 私は「前進」時代

岩井 私の場合は正確に覚えていないんだ。雑誌「社会主義」の前の「前進」のときに、したがって、昭和二十二、三年ですかね、板垣さんが中に立ってだいぶ金の苦勞をした。山川さん、高橋正雄さんもいた。場所がどこであったか、あるいは硫勞連合館であったか、よく覚えていない。それが最初の出会いだな。

滝野 岩井さんが東京にお出になったのは、岩井 二十五年だ。

滝野 文書で見ると(向坂先生は)戦前の労農派の闘将ということで出てくるが、当時もそういう印象でしたか。

岩井 やっぱり闘将という感じはしたよ。鋭い感じがした。晩年の柔和な顔とはちょっと違う。

## ぼくらの場合は穏やかだった

灰原 ぼくらの場合は、ここで何かをやるうという先生の気持ちがあったので、非常に穏やかにやられました。安井曾太郎の画集を持ってきてくれるんです。絵もちゃんと見なさいとか、文学をちゃんとやれとか。いきなりマルクス主義ではなく、そういうことからされた。戦術的なんです。非常にやわらかく出て、親切で、怒ったことはないし、「わかれ」とか「わかっただか」とか一切言わないで、やさしくつき合いされました。晩年はだんだんこわくなりました。だけど三池労働者には特別にサービスをしようか、拠点をここで何かをしようかと思っていました。

## 「向坂教室」は一九四八年から

灰原 講演会は三池政治文化研究会がやりましたが、社会科学研究会に転進して塚元さんとのつき合いもできて、私が本所支部の執行委員になったのが一九四八年十月です。生産部長ですが、毎週一回学習会をやることになった。私が執行部になってから組合の中に持ち込んで向坂教室ができたわけですが、その前に人がかわります。いわゆる社研ということで、東本願寺の講堂を借りて七講座ぐらいやり、一般公開をした。そのころは、七十人ぐらい集まっても大半は職員のクラスですよ。鉾員なんて講演に行きやしない。それを看板かけて一週間やって、これはいかんと。それでパッとやめて、本所支部に拠点を置いて二十四年からは一週間に一回ずつ来られました。

岩井 三池の中では本所が一番早かったんですか。

灰原 はい。

岩井 それから四山ですか。

灰原 それはだいぶたってからです。宮川さんが一九五三年から組合長に変わって、そのころから四山を含めて全支部に九大の協会の先生方が来られました。

岩井 必ずしも向坂先生がいつも来るわけではなくて、若手の学者もいたんですね。

灰原 ええ、川口武彦先生らが来られました。

岩井 それが世に言う三池学校、向坂学校だ。

灰原 週一度という大変ですが、本当に来られましたよ。

岩井 先生は幾つだったのかな。  
灰原 五十ぐらいですか。

バイタリティーに感心

岩井 私が先生の気憶で強烈だったのは、何年だったか覚えていないが、三十年ぐらい前かなあ、青森の浅虫温泉で地区労か県評かの労働学校があって、私と先生の二人が行った。立ちっぱなしで三時間ぶっ続けにしゃべるんだ。体によくないから座ったら、と言ったんだが、いや、そんなことはないと言ってぶっ続けにやった。その情熱には驚いたね。人間らしさ、誠実さ、学問的なことも含めて、とにかく私はそのバイタリティーに感心した。全く打たれた。

滝野 岩井さんが向坂先生と直接交流されたのは……。

岩井 細かい交流はいっぱいあるが、じかに先生の弟子ではなかったから、じかに教わるということではない。その意味では灰原さんとちょっと違う。(総評) 事務局長になってからのつき合いが多いわけだ。そういう意味ではしばしば相談をしたり、同志会のことなんかも話したと思う。国労のいわゆる民同左派を党員協議会にするというくだりが伊勢大会であったが、一九五三、四年かな。そのとき山川先生には文書で回答をもらい、同時に向坂先生にも相談している。そういう形のものはいっぱいあるんだな。

滝野 私が向坂先生の茶の間でよく伺ったのは、「日本の社会主義革命」(河出書房、一九五七年)の座談会で、大河内先生、名和統一さん、高島善哉さん等々とりっぱに語りあった。感心した、と。昭和三十一年暮れあたりでしょうか。

岩井 おそらく先生の気持ちでいうと、偉い人との座談をやる、岩井はできるだろうかという気持ちがある。まだ三四、五だから当然そう思われてしかるべきところだ。しかも系統的に勉強しているわけではないから。そういう意味でようやく、よかった、一安心したと、そういう意味だと思うよ。

三池と国鉄

灰原 岩井さんが事務局長になられて、生産性向上運動に本当に反対されて、あのころ総評はきちっとやられていますね。先生はうれしくてしようがなかった。例の六三闘争以来四単産の批判があって、総評の最初の分裂でしょう。三池と炭労、かかわりありますからね。ですから心配されて。

岩井 実はきょう武藤君と会って、国労を五年前の三池と同じようになぜ包めないかと、こういう話をしたわけだ。それには情勢がうんと違うが、当時、太田さんと私が組んである程度押しまくったわけだ。カンパは合計二十億を超えました。当時だって右派組合はいたが、表だってよう反対もできなかった。いまの総評は、ちょっとそうならんね。反行革十三単産といって、お互い評価するが、中身は危なっかしいんだな。

滝野 いまは横の連絡がぜんぜんないですね。当時はどうでしたか。そこが一つのポイントみたいな気がします。

岩井 党員協議会とか同志会とか若い連中が燃えるような情熱を持っていたんだな。いまは組合の指導部が一種のサラリーマン的な平穩におさまればいいんじゃないかという気持ちがあり過ぎるのじゃないかね。



滝野 当時の職場闘争の場合、形式的に言えば電産から日産、炭労、それが国鉄に波及していく形をとっていますが、そこら辺で岩井さんと灰原さんがお知り合いになったのはどういう経過ですか。

灰原 一九五三年に私は三鈺連（全国三井炭鈺労働組合連合会）の事務局長になったと同時に、企画部長になった。同志会で一緒になったんです。

岩井 三鈺連が新橋にあったね。そのときに何か記憶がある。

灰原 本当に岩井さんとは行ったり来たりして。

滝野 一九五三年というと、岩井さん、「つばめ」をとめたときになりますか。

岩井 そうだね。

灰原 首になったのはいつですか。

岩井 一九五三年の列車どめを五四年に追及されるわけだ。

滝野 当時、「六三」から「百十三日」ということで、三池の向坂教室が運動をずっと実践的にのぼってくる。そういうのを国鉄はどういうふうに見ていたわけですか。

岩井 反合理化のモデルだと見ている。

灰原 体質は一緒でした。同じ方向です。

岩井 それより前にちょっと質の違うのが日産だろうな。質はちょっと違うけれども、非常にりっぱな闘いをやったと思う。そういうものを経ながら、石炭の合理化だからね。幸いに灰原さんたちと知り合いになっている。それが結局、三池の大闘争を支えていく人脈みたいな関係になる。

灰原 岩井さんが三池担当だったらどうか。やっぱり反対でよかったんだな（笑い）。

三池は太田さんが来て、岩井さんは安保担当だったが、どのぐらい苦労されたか。安保闘争をやるためにも三池とくっついて機動させるといのが戦略でしょう。安保・三池闘争を見てもわかりますけど、政治ストというのは多かったですね。

岩井 三回やりましたわな。

灰原 いま総評が階級的な立場の政治闘争、それがちょっとフラフラしているのが残念ですね。向坂先生が亡くなって、これからは岩井さんがキャリアと実力でそういう役割を担ってもらいたいと思いますね。

### 「政治中闘」では叱られた

灰原 私は向坂先生で思い出を言いますと、こっぴどく怒られたのは「政治中闘」ですよ。炭労は産業別として阿具根さんを出すと。それはいいのですが、「政治中闘」という言葉を使った。三鈺連の事務局長時代ですが、呼び出しを食って、先生に、「君は党の中に労働組合の党をつくるつもりか」と、怒られたんです。いや、私じゃない、炭労が言っているんです、と言っても許されずに、ものすごく怒られた。党に対する気持ちというのは、共産党のように党が絶対で、反合理化なんて労働組合のやるものだ、そういう党のあり方ではなくて、階級闘争の頂点としての党づくりを先生は重く見ておられたんですね。純粋に、真剣に党をつくるということで、労働組合の候補者をやたらに立てて「政治中闘」なんていうのは、党の中に労働組合の党をつくるのか、と。いま現実にもうでしよう。それをガトッと怒られましたね。

もう一つは、私は三鈺連事務局長の後、中央党学校の講師になったりしていたんですが、

ある日、先生に喫茶店に呼ばれて、「君はもう少し怠けたらどうか。少し休め、怠けろ」と言うんです。私はうぬぼれたんです。おれは一生懸命走り回って書いてるし、労大の第一期の講師にもなって一生懸命やっている、認められたんだ。だから、少し休めと言われた、と。

ところが、三年、四年、五年たつて、安保・三池闘争でしょう。あれだけの闘争を総括するときにやっと思い出したんです。休め、怠けろと言われたのは、組合幹部が目への闘争ばかりやらずに将来のことを考えて蓄積しろ、と。安保という歴史的な大闘争を現地の一人の指導者として私はやって、それを総括するときに、力量不足ですよ。もちろん大論文を書くつもりじゃない。三池の総括です。しかしそれにしても、もうちょっと勉強すればよかったと、つくづく「参ったア」と思いました。

いま国鉄闘争でみんながんばっていますが、目の前のことばかりやって、外へも出ないし勉強もしないということでは困りますよ。

### 三池收拾で先生と相談

岩井 先生の思い出というのは、大昔のことはあまりはつきりしないが、十年、二十年ぐらいいの間だと、一つは三池の收拾のときね。そうめんをごちそうになって、先生が口火を切つて、もうこの辺がいいところじゃないかと言われた。当時、そういう雰囲気ではあったが、一方ではホッパー決戦をワツとやっているときだ。そういうときに收拾の方向をときっぱり言えるというのはさすがなんです。

もう一つは、総評事務局長をやめた後、私の事務所に成田委員長と向坂先生と二人で見て、衆議院議員に出てくれと二人とも言うんだ。私はむいていないからということでお断わりした。先生一人後に残つて、「実はおれも反対なんだ」と（笑）。党の委員長と一緒に要請に行つてくれと言うから来たが、本当はおれは反対なんだ、と。アハハ……、それを非常によく覚えてるね。

それから美濃部さんが都知事に立ったとき美濃部さんと向坂先生は学問的にも思想的にも必ずしも一緒じゃないんだが、やはり応援すべきだというきっぱりした態度をとられた。美濃部さんの勝因はもちろんいろいろあるが、向坂先生が非常にきっぱりとした態度をとつたということは、労働者、若者の間に非常に大きな影響を与えたのじゃないかと思う。

滝野 先生は原則論者とか言われるが、先生の本を読んだり、おはなしを伺ったりしているとそうじゃないですね、そのとき、そのときに必要な政治指導が示されている。

灰原 いま岩井さんのおっしゃったことは先生の一生一代の三池闘争をあれだけ盛り上げて、現地に飛び込んでいろいろ教えていただいて、こうだということときにはとめる。全体を見てるんですね。自分のためとか自分の派閥のためじゃない。

岩井 それが政治指導者ですよ。単なる理論の指導じゃない。

### 国鉄反マル生でも先頭に

滝野 そういう意味で国鉄闘争ということ、六九年に国労本部に資本論研究をつくり、七一年三月に国労反合研になった。

灰原 資本論研究会の発展ですね。七一年の反マル生のときにこれではいけないということとで反合研。和氣さんも一緒に見えて、十二時、遅いときには午前二時までおられた。あ

るときなんか、六時始まりなのに、先生一人しかいない。ずっと黙っていて、みんなが集まったらワースと、「戦争になったら時間厳守だ。ちょっとでも遅れたら作戦が狂う。君たちはマル生で闘っているんだらう。何をやっているんだッ」と怒られてねえ。体の強いうちはずっと来られましたね。

岩井 田町にも見えたな。

灰原 七一年に調査団で行ったんですよ。

滝野 苗穂にも飛ばれた。

灰原 私も新宿駅長室と新宿保線区長室に入りました。亡くなった野村先生も向坂先生も、みんな入ったんですよ。いま、それをやればいいんですよ。やれるはずですよ。

滝野 国労は二月から総学習ということだから動き始めた。

岩井 準備しているの。

灰原 私も講師であちこち行きます。

滝野 相当でかい規模でやるようです。

岩井 本当にできるだろうかと思っただけです。

滝野 やり方としては、それぞれの支部で工夫をこらしてという形になり始めているようです。

岩井 それがいいんだよ。

灰原 とにかく外堀を埋めて埋めて分断の、孤立化の、うまいといつかずるというのか……。階級的というか自信を持たない指導者がたくさん集まって話すべきときですね。労研センターもそうだと思います。ちょっとやられっぱなしだ。やられるのはみんな同じですね。首切り、配置転換強行、賃下げ。国労だけじゃないですよ。下は社青同とかまじめな党員とか協会と一緒に、労研センターとかずっとやっています。上の方がそうになっていない。このギャップですよ。これをわれわれが一生懸命になってやらなければいけないと思いますね。

滝野 そういう労働運動の状況とも関連するのですが、向坂先生が亡くなられて新聞論調の大きな特徴は、「一つの時代の終わり」ということですね。一つの時代の終わりに違いないわけで、その時代を今後どうしていくのかということになるわけです。

### 二つの矛盾に注目

岩井 いま波が一番強く右の方に引っ張られているんだな。ごきげんよく中曽根は右へ右へと走るんだが、やはり矛盾が起これらないとは言えないと思うな。とりあえず、一番問題になるのは大型間接税、これは国民に相当怒りを植えつけるんじゃないかと思うんですよ。太平洋を決め込んでみたがどうもおかしいと。これが相当出てくる。

もう一つ、「まなぶ」の文章でまとめようかと思っただけですが、支配者は憲法改悪はすぐ手をつけずに、つけられるものでもないし、やはり突破口に一歩問題を据えている。腹づもりとしては三分ぐらいにと。そうだったときに事実上憲法の空洞化が決定的になる。そのときにはたして力を持った軍人たちが時の政府、民間人にすべて従い切れるかどうか。それで「二・二六」のことを調べ始めているんだ。財界や時の政界がうんと腐敗して、その腐敗を直すのはおれたち若手将校だと。そういう発想があり得るわな。もちろんいまずぐそうなるわけじゃないと思いますがね。いま中曽根がどんどんごきげんで進めているところ

に火がつくとすれば、その辺じゃないかな。もちろん労働運動の側で言えばほとんど首切りやっけていく、賃下げをやる。そういうものが蓄積されつつあるからね。

#### 甲府支部のたたかいは日頃の蓄積から

灰原 その一つのあらわれが甲府支部の一月二十一日の本部のあるいは地方本部への申し入れ、そして西局に対する攻撃ですね。現地で反行革という座り込みをやった。これは大変なことです。小さいですが、ずっと連続して起こればいいんですが、ちょっと途絶えたにしてもあれは一つの典型です。りっぱですね。

滝野 二六日には千二百人集まったという話です。山梨県交通も首切りが始めているから、前を通るときは運転手が全部クラクションを鳴らす。

岩井 駅前でやったんだらう。私は二・一のときにあそこの岡島デパートの前でハンストをやったよ。甲府は伝統的に比較的強いな。

灰原 まじめですよ。

岩井 まじめだ。宮坂君でも新藤君でも典型的な労働者だな。

灰原 言うべきことはどんなことがあっても言う。言ったら損するとか言ったから後でどうとかためらいがあるものですが、どんどん言うんです。こうしてください、ああしてくださいとしょっちゅう連携をとって言う。田島さんの場合だってそうでしょう。あれ、術じゃないんです。あんなにまじめにきちんとやりながら、苦しいときに助けてもらえると言っちゃおかしいが、理解してもらっているということ。今度だってそうでしょう、家族連れで突っ込んできて、本部も地本もみんな理解して、一生懸命聞いて、西局にだって突っ込んでやっているでしょう。まじめなことをやってきられるんですよ、産別の本部とか地本から、生意気だとか出過ぎているとか言われているんですが、あそこだけはそうじゃないんです。それが不思議なんです。岩井さんがおっしゃったように幹部が偉いのか……あれが本当の原則なんですよ。言うことは言うが、バカにしているわけじゃない。きちっと自分の現場の問題をこうだと言う。

岩井 労働者の姿勢として一番純粹な面が出ているでしょう。仲間内だから、多少文句があったり誤解があったって、そんなものそれほど考慮することはないと。言うべきことは言う、やるべきことはやるということが、日ごろの蓄積があつて通るんでしょうね。

灰原 組織を大事にするということになれば、いろいろの配慮をするでしょう。まじめにやれますよ。ところが、つい派閥で、おれが執行委員になるとかあいつをけ落すとか、邪念が出てくる。勢いに乗ったときに言い過ぎている点がきつとあるんですよ。

#### 勢いにのったときがこわい

岩井 一番大事なのは勢いに乗ったときの方がこわいということだよな。

灰原 『みいけ十年』というのは向坂先生が一番うれいときでしょう、そのときに、「りっぱな山のように見えるが、近づいてみると亀裂が多い、調子のいいときにちゃんと気をつけろ、組織づくりをやれ、活動家はセメントのつもりになって亀裂を埋める」と。

一番の頂点、みんなが有頂点になっているときに先生はそう言われたんです。本当に大切なことですね。それが、セメントになるよりも一等地に出てうまいことをしようとか、いい目にあおうとか、そういう運動になっちゃっているんですね。でも若い活動家があちこちに出てきている。闘いの中でりっぱに育ってきています。これは大きいと思います。

## 向坂先生の後を継ぐ

灰原 向坂先生は種をまいた。それをみんなが育てていく、種まきは終わったと。これから労働運動をつくるという接点だと思うんです。がっかりしちゃいけない。すぐにはうまくいきませんよ。向こうだって必死ですよ。一時代終わって、しばらくはおれたちの時代が来ないのじゃないか、ではなくて、先生自身の後を継いで、岩井さんも元気だし皆さんおられる。われわれもがんばりますから。一時代終わったのではない、向坂先生は亡くなつたが、これからはみんな力で合わせてわれわれの弱さ、間違っている点を直していかなければいかんですわ。

岩井 先生が種をまいて死んでいった。それを新しく開墾していくのきのポイントは、私は一人ひとりの労働者、勤労者をどう思想的にも強くしていくかということだと思ふな。それがおそらくこれから困難な状況に立ち向かう一番の力じゃないかと。いまひとしきりまじめな労働者タイプの話が出たが、このまじめというのが非常に大事なんだね。まじめというのは別に酒を飲まないことじゃなくて、仲間同士の信頼感とか誠実さということだ。甲府の話に関連して言えば、城をつくるのは人であるという信玄の言葉どおりに、まさに一人ひとりの労働者が、自分が鍛えられていくことが、いまの困難を切りかえていくかぎになる。それしかないと思ふな。

灰原 そうですね、政策とか言ったって、戦術としては考えられますが、やっぱり組織の力は団結して、幹部と活動家と一緒にやってやることですよ。

岩井 それができるれば政策であろうが何であろうが、みんな出てきますよ。政策論を別にバカにすることはないが。一番ポイントのところ、社会党大会なんかでもどうも無視しちゃうな。

滝野 その意味では現場が非常にがんばっているだけに全体的な指導が……。

岩井 社会党にとつては逆にチャンスだと思ふんだ。中曽根はやり過ぎて必ずしっぽを出すから、それに向けて一人の労働者、一人の党員に誠実に答えていく方針が大切だと思うな。全体流れている雰囲気はどうも浮わつた感じがする。総評もそうだ。真柄君の問題ではないんだな。全体の流れだからな。

灰原 教育からしてマルバツ方式できているし、コンピューターの中央管理でしょ。システム化された中で精神とか思想がだんだん弱まっていく。しかし、それは本来の人間の姿ではないことから、これはひど過ぎるぞということ……。闘争を忘れた労働者は必然的に団結なんかするはずがない。闘いの中で弱さもわかるし、みんなやっているなど。はち巻き締めて、よし、やろう、ということになるんで、春闘だって全然ストライキなしでしょう、上の方で話し合ってたって全然だめだ。「まじめに」というのを甲府がやっている。家族しよって四十何名、アルバイトやっているのを休ませて自発的に参加した。あれを見て感心しない者はいないですよ。労働者は特に助け合っていかなきゃ。それが無い、上にはないんです。下ではたたかかれているから、一人ひとりが白兵戦をやっている。国労は特にね。その中で活動家ができないはずはない。それに負ける、勝つと言えば、三池・安保だってあれだけやって兵を引いたんだから、勝つとは簡単に言えません。しかし、次の時代というか、種を木にしていく、林にしていく、それは闘い抜きにはできません。

滝野 ありがとうございます。お二人とも健康に留意され、私たちの先頭にたつてくれることを、みんなが願っていると思います。

## 先生の字で組合旗

吉田 憲夫

「資本論」はマルクスが生涯をかけて労働者のために書いた本です。決して学者のために書いた本ではありません。だから労働者の皆さんに理解できないことはなく、少し勉強すればすぐ分ります」と、向坂先生は七〇歳半ばという高齢にもかかわらず、毎回国労会館での資本論研究会に出席して下さって、メガネの奥の細い目の笑顔で語りかけて下さいました。

資本論は二、三回読んだだけで理解できるものではありませんでしたが、研究会での先生の寺小屋的な話に魅せられ、その多くの話しを通し学び、授かるものが大でした。串田孫一と野球を観に行ったこと、女優の原節子が好きだった柔かい話、ウナギが好物だったこと、等、二年間楽しく教えを受けました。

特に食糧の入手難の時に畑でジャガ芋をつくり、本来専門家である近所の百姓にジャガ芋づくりの手ほどきを請われたという体験談は、いかに自然の法則を、理論を学ばなければならぬか。理論と実践の組み合わせの重要さが、労働者の組織強化、社会発展にいか必要であるかを述べられていることが後になりわかりました。

このように先生の多くの「書」は額に汗して働く者のために、労苦を費し気を配って書かれています。労働者の輪に入り労働者と共に、労働者の道を手足をとって教えていただきました。組合旗を新しくしたとき、先生にお願ひし、書きづらい分会名を何度も練習され、夜ふけまで大変御苦労をかけてしまいました。立派な赤旗ができました。先生にお見せしたところ、「ホウー」とおおいに満足の様子でした。先生の書による赤旗は他には無いのではないと思ひ、旗の精神は苦難の道の先には必ず明るい希望の実現があることを確信しなければなりません。

七五年から職場で始めた資本論研究会は、先生の力添えで講師に来ていただくことができ、九年間の協力を得て第一巻を読み終えることができました。この記念に『資本論』一巻に仲間全員に向坂先生のサインをいただきました。このサインが先生の最後のサインでは……と聞き、残念でなりません。

資本の中傷・誹謗、弾圧に屈せず闘い続けたマルクスと向坂先生。働く多くの仲間、同志の個々の力は微弱であっても、意志と信念はそれぞれに血となり肉となつて、労働運動の場で社会主義活動の場で全国の仲間が任務分担をして継承していきます。(国鉄労働者)

## 「CO特別立法」と向坂先生

山下 開

向坂先生の逝去の報に接し、哀悼の思いつきません。はじめて先生の講演をきいたのは、一九四八年、三池政治文化研究会が主催した夏季講座でした。そして翌年には、三池労組本所支部に社会科学研究会が組織されたので、会員となり、週一回、先生の資本論講座に参加し、学習したことが、その後、私が社会主義・労働運動につくすことが、生涯の生き様であることを決定づけたと思います。

当時の先生はまだ若かったため、学習会はきびしく、睡眠・喫煙は許されなかった。解つたふりをした質問・意見については、顔を真赤にして、容赦なくたたき伏せられたもので

あります。その反面、講座のなかで、処女峰アンナブルナの物語”、“芭蕉の句”、“首狩り族の話”、“小魚とりした大牟田川の思い出”、“拘留所内での泥棒との出会い”などをまじえた講義は、楽しく、忘れ得ないことであります。

また先生は、この他、三池労働者と家族に身魂をこめ気遣い、同志として闘ってこられました。“英雄なき一三日のたたかい”、“三池と安保闘争”、“三池大災害と被災者をめぐる反合理化闘争”という三池の歴史と共に在ったと思います。とくに印象に残っていることは、一九六八年一月の一酸化炭素中毒被災者を守るたかひのことです。

総評・炭労・三池労組そして日本社会党が院内外のたかひをとおして、とくに三池では、家族たちの坑底座り込み闘争、労働省前における集団ハンストなど画期的戦術を駆使して闘い続けた『特別立法』を形骸化しようと政府と三池資本は、治癒認定した被災者を解雇する弾圧を加えてきました。そのとき、三池労組は組織をあげて反撃したのです。だが、労働情勢がまだ高揚しない段階では、妥協せざるを得ない結果になります。妥協した六八年一月三日の山元では、組合事務所に集まった被災者家族の表情には、悔しい怒りと、やり場なき不満が交錯しているような様子でした。そのとき、向坂先生が現地激励に來られた。

泣き伏している被災者家族を前にして「いま泣いているときではない。たたかひのなかで一步後退することもあるが、悔しいからこそ、社会主義をめざして、次へのたたかひにむけて闘う以外はない……」という主旨であった。それも、怒ったように説得されたときの姿に、側にいた私は、一瞬驚いたものですが、次第に敬虔な気持になったものです。勿論、被災者家族たちの顔も、ほころび、拍手のなかで交流が終わったものです。

指導者はふだん自信をもっているとはいえ、不利な条件で妥結したときは、大衆の中に這入ることを避けることがあります。大衆に接するとしても、同情的に迎合することに落ち込み易いものです。右翼的労働組合の幹部のなかには、当然のごとく居直るものもいる。それでは本物とはいえないことを、まざまざと教えられたものです。労働者が解放される道筋をつねづね自信を持って語りかけることができるかどうかを強く反省させられたことでした。(元三池労組書記次長)

## 闘病の中でも私に勇氣

滝野加津子

社会主義社会の実現にむけて、ひたすら理論と実践をつまめた、あの底抜けに明るい笑顔はもうこの世にない。百歳を越えるまで生きていてほしかった。

私が先生に出会ったのは一五年ほど前、国労本部での資本論の学習会の場であった。その頃私は、共産党系の市民運動に参加していたが、それに疑問と限界を感じていた。

はじめてお目にかかった先生は、やさしく、鋭く、厳しかった。こんなにも表情の豊かな、魅力をひめたひとに、それまで会ったことがなかった。ある種の感動を覚えたことがきのうのように思い出される。

また、最近では、同じ病棟で闘病生活をする仲間として先生に接することになった。

先生に最後にお会いしたのは、私の四度目の入院が決まったときだった。すっかり意気消沈して先生の病室を訊ねると、キラキラと輝いた眼差しで私をみつめ、ベッドから手をさしのべて握手を求められた。あのやさしい手のぬくもりと鋭い瞳を私は生涯忘れること

はないであろう。力強く生き抜くことへの私の心構えの中に一本の鋼鉄の芯を与えられたかのようだった。

終始、付添っておられた奥様は、「向坂は近頃せんそくのような症状が出て発作（というほどでもないでしょうが）が起るたびに、口を一文字にくいしびり、目をとじ顔をまっかにし、からだを波打たせて苦しみに耐えています」「八十七歳の老人もがんばっているのに、お若いあなたが一時的にもせよ落ちこんだりしてはいけません」「がんばってください」と私を励ましてくださった。

その時、先生は、いくたびかの危機を乗り越え、生きることへの意欲をからだ全体で示された。主治医も驚くほどに回復のきざしをみせ、安定しておられるということであった。それから二ヶ月ほどして亡くなられた。

戦前の厳しい弾圧の時代から今日にいたるまで、不屈の実践力で、社会主義運動の先頭に立ち、その理論的著書をも数多く残された先生は、さすが闘病生活でも驚くほどの力づよさを発揮された。

この一五年の間、私はお宅のお茶の間や、学習会・講演会で、先生のお話をうかがって、婦人会議の運動に参加するようになった。充実した歲月だった。これからは、多くの同志とともに先生の遺志を受け継いでいくべき任務を果さなければならぬ。

悲しみを乗り越えて……。

（日本婦人会議中野支部）

## 「よくねむりなさいよ」と私に電話

大木 五郎

向坂先生が永眠されて、日本における社会主義の水準がその分だけ低くならないためにはわれわれのような労働者が、団結すればどれだけ敵に打撃を与えうるか、未来は労働者のものだとということをとたかかった者が自らの実践をとおしてマルクス主義の正しさを天下に公言しなくてはならないと思う。

ある年の或る日のこと、組合内部で激しい対立選挙で代議員に当選し、明日は全国大会に出発しようというその晩に向坂先生から電話をもらった。

先生が私に言ったことは、「○○さん、あなたはよくねむりなさいよ」というひとことだけだった。ほかには何も言わなかったけれど、選挙にようやく勝って戦場にでものりこむような気持で興奮している私たちの心をズバリみぬいて、あたたかい激励の言葉であった。

これよりさき選挙運動中に、われわれが苦戦におちいつていることを報告したとき、先生は、「負けたっていいじゃないか、せいっぱいがんばりなさい」と言われたということも、関係者からきかされたものである。

「何とかして勝ちたい」、そればかり考えていた私としては、思わず「ウーム」とうなった。何となく心の余裕ができたものである。

私は、「よくねむりなさいよ」という先生のあのあたたかい一言が今も耳に残っている。人間らしいあたたかさ、社会主義者とはこうでなくてはならないと思う。

そして、「負けてもいいから、せいっぱい当面のたたかいはがんばりぬく」ことができる労働者を作ることを人生の目標にしたい。

（元全電通千葉支部委員長）



## 私の生き方を決めた先生方との出会い

村松 七郎

まだ焼け跡がそのまま残っていた戦後、「米よこせデモ」から、皇居前広場での「血のメーデー」へと、世の中は騒然とし、人々はみな何かにすがるように生き、若者たちは「自分たちの手で社会を変えよう」と強い希望の夢を革新政党へと託した時代であった。私は丁度、法政大学から「社会タイムス」という新聞社へ勤めをかね、身体ごと時代の渦の中へのめりこんだような意気を感じていた頃でもあった。

昭和二十九年だったと思う。労働大学一期生たちの有志が集まって、当時できたばかりの社会主義協会でジックリと「資本論」を読もうということになり週一回顔を合わせた。それも、講師には向坂逸郎、高橋正雄の両先生が代り番に講義をしてくださるといふ、いまから考えればビックリするような贅沢きわまりないゼミであった。三池闘争の「向坂教室」を持って来てもらったようなものである。この教室は後になって岡茂雄先生に引き継がれ、かなり長い間勉強会が続いた。顔ぶれには上野建一、関山信之さん等々いく人かの顔が想い浮かぶ。私たちも若かったせいかな、それぞれ勝手な御託を並べ、ずい分と向坂先生からお叱りもいただいた。間違ったことを許さない、怒りっぽい先生であった。

あれから三十年の年月が過ぎてしまった。向坂先生は、いま、もういらっしやらない。この正月の大寒の日に亡くなられた。八十七歳尊い生涯であった。一月二四日の最後のお別れの朝は寒い冬空であった。

私はいへん幸せな屋の下に生まれたと思っている。法政にいた頃は、私の先生たちはみな大内兵衛門下生で、日本のトップクラスのマルクス経済学者ばかり。とくに大島清先生、宇佐美誠次郎先生には親しくお話を聞く機会がたくさんあった。社会タイムスに入ってから、何しろ編集長はかねて尊敬していた文芸評論家の青野季吉さんで、編集委員には岡崎三郎さん、政治部の部長には木原実さんと、どの人もみな大きな生き方をされている方々ばかりで、そういう方々の生きる姿を目の当り近く眺めてきて、自分の身体の中へ自然とこの先生方の生き方を糧としてうつしとりたいたいという知らず知らずの願望があった。あの時の、この先生方との出会いが、いまの私の生き方を決めてくれたと、そう思っている。

(船橋児童画教室)

## 「土づくり」で意見交換

小林 隆

私は、向坂先生に二度、先生のお宅でお会いしたことがあります。一度目は一九七八年六月一八日。二度目は一九八二年一月一四日です。

一度目は、たまたま郵政省の行う訓練で上京中の日曜日にお会いしました。当時全通は七八春闘における「指令二七号」による統一スト脱落をうけて大きく混乱していました。こうした中で国立市にある中央郵政研修所での生活は単調かつきわめて退屈なものでしたが、一方では省の基本理念(省に従順な職員づくり)が常に追求されていました。

私自身全通組合員としての自信・誇りさえ失いかねない訓練の毎日の中で、向坂先生にお会いし、先生の「生きざま」をうかがった時には大きく感銘さえしたことを今なお覚え

ています。

今思い出すのは当時先生の庭に「ナス」があり、「ナス」をうまくつくるには「土づくり」が大事だという話をされたことです。家が農業である私は、先生と「土づくり」について相当の時間意見を交換させていただきましたし、労働運動も「土（基礎）づくり」であることを学びとることができました。そしてこのことが、この年の支部大会で支部書記長に選任され、以降反マル生越年闘争等、従来以上に全通労働運動に深い関わりをもつことができたひとつの礎になったと感じる今日この頃です。

この時先生は非常によく話をされ、あれだけ甘いものが好きにもかかわらず、麦茶ともに出されていたソ連のチョコレートを先生の分まで私に食べさせていただきました。そしてあの書庫も自ら案内され、見せていただいたのもこの時ですし、「僕が死んだ時、この本は君たちのものになる」といわれたことを今なお忘れることができません。

二度目は、たまたま労大春闘講座で上京中に講座の一部をサポートして友人ともにお会いしました。

四年前同様のいろいろお話をしましたが、この時は特に「ドイツ語と酒とタバコ」について話され、「ぜひドイツ語を勉強するよう」に言われたことが脳裏に残っています。そしてこの時、その翌日（一五日）付発行の「嵐をついて（新評論社）」を一日早くサイン入りでいただき帰路の電車の中で読んで帰ったのがつい昨日のようにさえ思えます。

今、私は、自宅の本棚にある向坂先生の本を前にしてペンをとっていますが、社会主義運動、労働運動が困難な状況にある今こそ、向坂先生が生涯追求されてきた「理論と実践」の真価が問われていると思います。全通運動はいっそう右傾化が進んでいる今日ですが、職場組合員とともに「土づくり（五人組の確立）」の課題に全力を傾注していきたいと考えています。

（全通組合員）

## 向坂先生は生きつづける

平岡 幸雄

私が向坂先生に身近にお目にかかり、声をかけていただいたのはたしか一九六七年の選挙のときでした。事務所では先生は、突然私に向かって「君は『資本論』を読んだことがあるかね」とおたずねになりました。「あんなむずかしい本読めません」というと、先生は「松本清張の小説より面白い本だよ。うそだと思ったら僕の家へ来なさい」といわれました。

こんなことがきっかけで先生の所にお伺いするようになり、和気さんのやっている「資本論」、レーニンの「労働組合論」などたくさん学びました。

いつもきびしいお言葉がとび出しましたが、行くたびに眼のうるこがとれる思いがして、マルクス、エンゲルス、レーニンの発見した科学的法則のすばらしさと、先生のお人柄に惹きつけられるようになりました。

先生のお話は、いつも具体的でした。

秋になると私の家でとれたサツマ芋をさし上げたことが何回かありましたが、「君の芋は、今まで食べた中で二番目にうまい。僕も戦争中は芋の作り方をいろいろ研究しながら作ったよ」と云われ、くわしく先生の研究のし方を話されました。「反デューリング論」にある「自由は、……諸法則の認識にあり」ということを、事実で示されたのです。

運動のことも多くを学びました。

メーデーの日は、必ず新橋の街頭に、目を細めながら隊列を見つめる先生の姿がありま

した。歴史の発展の法則への確信と労働者への愛からだと思えます。帰りにお伴すると、千足屋で甘い物をごちそうしてくれました。先生は戦前、大森義太郎さんと会われるのに、官憲の目の届かないこんな金持の来そうな店をわざわざ選ばれたとのことです。緻密な方でした。

また仲間を大事にされました。

私達の尊敬する先輩が研究会を組織したとき、社団法人であったところから、その発会式に、来賓で労働大臣が来しました。先生も来賓で同席されていたことから鬼の首でもとったように批難する人達がいきました。私達も「なぜ、主催者に注意しなかったのですか」と云ったところ、先生は「なんでも口に出して云うのが正しいとは限らない。黙っていることが正しいこともある」と云ってとりあいませんでした。その会は、発展して、今、全国の活動家の拠り所の一つになっています。

先生の肉体は亡びましたが、思想は永久に生きつづけます。先生の姿を見ることができないのは悲しいことですが、先生は、私達の中に生きつづけるのですから、さびしいことはありません。

(海老名市市議員)

## 私たちの背中に先生の笑顔がある

池村 武司

数年前、向坂先生の「帝国主義論」の学習会に参加させていただいたことがある。何度か出たが、忙しにかまけ、怠惰も重なり、一度、二度と出られないことが続くと思つづらくなり、結局、落ちこぼれてしまった。その時以来先生にお会いする機会もなく、一月二四日、お別れの会の時、晴れやかな先生の笑顔の写真と悲しい最後のお別れをすることになった。「学習の大切さ」を口では言いながら、実際にはやりきれない自分自身のふがいなさを悔いる。そして先生のあの笑顔にはもう写真でしかお会いすることができないのだ。

先生はある時、「社青同が自分の子供だ」とおっしゃったそうだ。子供は親の生き様を見て成長する。まさに社青同は、そして自分は先生の生き様に学び、少しでも近づこうと一生懸命になってきたのだと思う。

先生の子供である私たちにもっとも欠けているのは気迫と人間くささである。腹の底から沸きかえる資本への怒りから「ナニクソ、ヨーシ、ヤルゾ」という気迫である。そして、損得勘定では決して律しきれない仲間を大切にするまごころである。このことが、言葉の上のことだけでなく、実践の中から血となり、肉となって一人ひとりのものになったとき、社会を革新する「物質的な力」としての鉄の団結がつくりあげられる。先生は、自らの全生涯の生き様を通して身をもってこのことを教えて下さった。「労働者が社会の主人公だ」という社会主義の魂は、最後の瞬まで先生から消えることはなかった。

私たちははなはだ不十分である。しかし、独占資本は攻撃の手を決してゆるめてはくれない。労働者の血を吸い、肥え太ってきた独占資本は、今また、国鉄労働者に荒々しく襲いかかっている。だが労働者には、真赤なあつい血が流れている。脈うつ労働者魂がある。労働者は生身の人間だ。将棋の駒じゃないぞ。独占資本の言いなりにならないぞ。一人ひとりに首を守らなければならぬワケがある。今こそ、その下根性を示すときだ。そうだ、それが向坂先生の遺志を継ぐことだ。前を向いて闘おう。立ったまま前を向いて一歩前に出よう。敵には決して背中を見せないぞ。私たちの背中には、先生のあの、あたたかい笑顔がある。

(国労本部書記)

## 著書の大筆執筆 ゆかりの松本・扉温泉

二十二日死去した、社会党左派の理論的指導者で社会主義協会代表の向坂逸郎さんは、多数の著書のもとを松本市郊外の扉温泉の旅館明神館で執筆した。

中でも『資本論』の翻訳のためには昭和二十一年二月から十月までと、四十一年秋から四十二年春までの二回滞在している。

また新緑や紅葉の溪谷美にひかれて毎年のように訪れ、旅館明神館の主人らと親しくしていた。

明神館がパンフレットを作る際には、「僕は毎年、ここに来てから宣伝部長をやる」と言い出し、「扉という謎のような地名が面白い。真理の扉、美の扉というような言葉が思い浮かぶ」と宣伝文を寄せてもいる。

今では従業員も入れ替わり、向坂さんを知るのは主人の家族らだけだが、「今年もまた来てくれるような気がしていたのに」と残念がっていた。

明神館の主人、斉藤忠房さん（六八）は「先生は終戦のあくる年の二月からみえるようになった。当時はうちも二十部屋ほどの小さな旅館で、先生は静かなところが気に入られたようで、『ここへ来ると東京より二日は能率が上がる』とおっしゃっていた。いつも、ひと月から半年ぐらい滞在され、浅沼社会党委員長刺殺の知らせを聞かれたのもここだった。美濃部さんが都知事選に初めて立たれたときも、ここで執筆中で、ここから何回か東京へ応援にいかれた。明るい、できた人で、ひっきりなしに訪れる学生などの来客が帰る時には、必ず玄関か途中まで見送りに出られるし、勝手場に出てきて『みんなの方がいいものを食べてるね』などと軽口もいわれた。昨年の正月に最後にみえた時には『ここでは、ご主人、奥さんに次いで、僕が三番目の古顔だね』といわれていたのに……」と語っていた。

また、女主人の斉藤恒子さん（六三）は「いつも規則正しい生活に感心させられた。午前六時半ごろ起きられ、きちんと着物を召して、正座で机に向っておられた。毎日、午後三時ごろから、扉畔や近くの山道を二時間近く散歩されるのが日課で、近所の人も気さくに話をされていた。訪ねた学生さんたちも、実際に先生に会うまではブルブル震えていたけれど、会うとすぐに打ち解けて、先生の散歩にぞろぞろついていった。酒は一滴も飲まれなかったが、甘いものがお好きで、私たちと一緒に飲む夜のお茶を毎日楽しみに待っておられた」と思い出を語っていた。

（「朝日」一月二十三日付長野県版）